

まつやま里島ツーリズム連絡協議会

「里島めぐり」で

交流・関係人口の拡大を

まつやま里島ツーリズム連絡協議会会長 田中政利



忽那諸島：平成17年1月に旧中島町と旧北条市が松山市と合併。有人島9島の人口は4,353人(令和元年5月1日現在)。柑橘栽培を基幹産業とし、「紅まどんな」などの主要な産地となっている。また、昭和61年から、毎夏開催されているトリアスロン中島大会には島外からも多くの人が集まり賑わう。

忽那諸島には有人島が九島あり、「まつやま里島ツーリズム連絡協議会」では、忽那諸島で活躍しているみなさんが、それぞれ各島の個性を活かした「体験」「文化」「食」などの体験メニューを「里島めぐり」として行なっており、島外から多くの方が来島してくれている。

市町村合併、「しまはく」開催を経て結成

私が住んでいる忽和島は松山市の沖にあり、平成一六年までは温泉郡中島町だったが、同一七年一月一日に松山市に合併した。町全域が島だったのが、「松山市の島の部分」となった。それまでとは違い、私たちは一層、これからの島をどのように元気にするのかを考えるようになった。

合併後すぐに、松山市のまちづくりを考える事業「みんなのまつやま夢工房」で、忽那諸島の活性化策について語

る場を設けてくれた。各島の住民や、さまざまな分野の関係者が何度も集まり、島を元気にする方策について議論を交わした。そして私たちは、当時の市長に対し、生活環境の整備、農漁業や観光の振興、教育・スポーツの振興などあらゆる提言を行なった。それらを実現しようと、自主活動組織として立ち上げたのが「松山離島振興協会」だった。また、夢工房の観光部門で提言されたのが「松山島博覧会(しまはく)」である。私は、松山離島振興協会会長として、「しまはく」の実行委員長に選出された。「しまはく」は、忽那諸島の有人島と旧北条市の鹿島、高浜・三津浜などを舞台に、農漁業体験や伝統芸能など、島ならではの体験イベントを行なうものだった。

開催にあたり、各島のみなさんに、各々でイベントを開催してもらおうよう話をしたものの、二つ返事で了承という



毎秋に開催する「瀬戸内探訪クルージング(里島めぐり)」。二神島にて。

わけにはいかなかった。「そんなことをしても何も変わらない」という意見も多かった。農業などの家業があり、それどころではない。親戚以外の島外客を迎えるために、それだけのことをしなければならぬのか不安も大きかった。そこで、松山市の職員は何度も島に足を運び、島びとの声を聞き、信頼関係を築いた。そして、「島を巡るウォーキングはどうか。普段つくついでる料理を『しまめし弁当』にして提供してみても」と実現可能な提案を行なった。そうすると、「私たちでもできそう」と事業に参加してくれる島びとが増えていった。こうして私たちは、平成二一年に「プレしまはく」を、翌二二年には「しまは

く」を開催することができた。

「しまはく」では、九四もの体験メニューを実施し、約二万人の人が参加してくれた。「しまはく」で立ち上がり盛り上げを見せたイベントや体験メニューを一過性のものとしないうち、各島の仲間とともに事業を継承し、島を盛り上げていこうという気持ちになってくれ、平成二三年に「まつやま里島ツーリズム連絡協議会」を設立した。

### 協議会の想いと行政の施策との合致

平成二四年に松山市は、「島びとが活き活きと輝く笑顔あふれる里の島」を目指す将来像として「愛ランド里島構想」を策定した。その重要施策の一つにツーリズムの促進が入っており、私たちの活動の支援をしてくれている。

平成二六年には、瀬戸内海国立公園指定八〇周年と瀬戸内しまなみ海道開通一五周年を記念して、愛媛県と広島県が「瀬戸内しまのわ2014」を合同開催した。「島の輪がつながる。人の和でつなげる。」をコンセプトに、島しよ部に暮らす人と訪れる人をつなぎ、瀬戸内独自の文化や魅力を発信するイベントだった。忽那諸島でも、それまでの体験メニューに加え、新たなイベントを開催した。島の魅力を子どもたちに体験してもらう臨海学校「しまのわ冒険学校」、ファミリーを対象に釣りを通じて島を体験してもらう「ファミリー釣り大会」、幅広い年齢の方に島の魅力を感じてもらおう「しまのわ学校体育祭」は、「瀬戸内し

まのわ2014」を契機に生まれたイベントで、多くの人が来島するきっかけになっている。

「しまはく」と「しまのわ」を経て、毎年、多くの方が来島してくれている。また、松山市は合併以降、職員が異動で入れ替わっても、「しまはく」開催時と変わらない気持ちで島の振興に向き合ってくれている。

### 平成三〇年七月豪雨災害

平成三〇年には非常に悲しい出来事が起こってしまいました。七月の豪雨災害では、私の住む怒和島で、三人の尊い命を亡くしてしまった。二人の小学生と、そのお母さんである。怒和島には六人の小学生がいたのだが、二人を災害で失ってしまった。過疎化で小学校の休校の話が出て、何とも言えない寂しさを感じている最中の出来事だった。私たちにとって島の子どもたちは宝であり、島中の年寄たちの孫



毎年開催している「しまのわ学校体育祭」。

のような存在である。子どもたちの笑顔は、島のみんなの癒しであり、元気の源である。そんな島の宝を災害で失ったことはやりきれず、今でも心に深い悲しみが残っている。それに至る所で畑が土砂や汚泥に埋まり、高級品種の柑橘ハウスが流された。農業を営むのは高齢者が多く、被害を受けて農業をやめようかという声も多く耳にした。

それでも、もう少し頑張ってみようかと、勇気を与えられたのもまた、子どもたちのおかげだ。四人の子どもたちは、亡くなった三人の冥福を祈りながら、足を踏ん張り、懸命に前を向いて生きている。そんな子どもたちの姿を見て、大人たちも頑張ろうという気持ちになってきている。

協議会のメンバーも、自身の園地が被害にあったり、活動場所が土砂置場になったりで、普段のような活動ができなかった人も少なくない。秋に開催を予定していた協議会主催のイベントは被害状況を考慮して中止とした。興居島こゝろしまで毎年開催している「しまのわ学校体育祭」は、地元からの応援の声もあり、今年三月に何とか開催できた。約二〇〇人が島外から来てくれ、島の自然や島びととの触れ合いを楽しんでもらうことができた。

平成三〇年度は災害により中止となった体験メニューやイベントもあったが、年間で約六六〇〇人が参加してくれた。これほどの人が島に興味を持って来てくれるのだから、その魅力を思う存分味わってもらえるよう、私たちも頑張っていこうと思う。

## 高齢化と移住者の力

「しまはく」当時、体験メニューを始めたメンバーの中には、高齢により続けられなくなった人も多い。陸月島の「お大師参りウォーキング」もその一つだ。島四国八十八ヶ所を巡りながら、島の自然を堪能し、島のお母さんたちが手塩にかけた「しまめし弁当」を味わえるもので、多くの来島者を迎えていた。しかし、陸月島では約九〇パーセントが六五歳以上であり、一〇〇人以上の来島者を相手にするには歳をとり過ぎてしまった。忽那諸島全体での高齢化率は約六五パーセントで、どの島も高齢化は著しい。「しまはく」開催当時に比べ、一〇も歳を重ねたみんなは、来島者を迎える気持ちはあるのに、体が言うことをきかない。こればかりはどうすることもできず、私の悩みである。

そのような中、島に移住をして、活性化に取り組んでいる団体がある。「NPO法人農音のうおん」である。彼らは、移住者目線で島を盛り上げていこうと努力してくれており、移住体験のメニューを実施している。中島では、農音を中心に移住者が増えてきている。彼らの力は、ツーリズムの推進にも期待ができるもので、協議会の理事になってもらっている。

また、平成二八年からは、「地域おこし協力隊員」が島に入ってきた。現在二名活動しているのだが、今年七月に退任する協力隊員は島での定住を決め、協議会の会員にな

ることも決意した。彼もまた、移住者目線で島の活性化に取り組んでくれており、これからの島を担っていく力となってくれるよう期待している。

## 興居島で見るツーリズムのあり方

興居島では、田村博文氏が協議会の副会長として、さまざまな調整役を担いつつ、自身でも奥様の文江氏と一緒に「田村さん家の島ぐらし」として体験メニューを行なっている。柑橘などの収穫や島ならではの料理を堪能でき、お

客さんのニーズによって内容を変えるそうだ。田村夫妻の心温まるおもてなしは、口コミで広がり、多くのお客さんが「田村さんちで、興居島の暮らしを体験」している。

田村氏もまた、協議会が設立した時からずっと変わらず役割についてくれており、協議会の役割や、ツーリズムのあり方



興居島の田村さん夫妻。



興居島の藤内さん(左)と山下さん。

など、ともに思いをめぐらしてきた。島が元気であるためには、島びと自身の生活の基盤も固めなければならない。農業をしながらのツーリズム活動は大変なことである。そうした中、これからの忽那諸島のツーリズムを担っていく人物として、私も田村氏も期待をしている人たちが興居島にいたので紹介したい。

島の住民ではないが、さまざまな新しい体験メニューを発案・実行してくれているのが、忽那諸島で唯一のカフェである「しまのテーブルごしま」オーナーの藤内宏次郎氏である。フレンチシェフである藤内氏が活動拠点として

いるのは、廃校となった小学校。一階の教室をカフェスペースにし、島の食材などを使った料理を提供している。忽那諸島全体を見渡しても、藤内氏がつくる料理ほど、繊細で洒落た料理はない。初めて訪れる人も、リピーターの人も、その料理に魅せられ、年間を通じて訪れている。

藤内氏は、料理以外にもさまざまなイベントや体験メニューも実施してくれている。藤内氏にそれらを考案するポイント聞いてみたところ、「島にある『自然』『文化』『島びとの暮らしぶり』は、日本本来の姿が残されているし、守るべきものと考えている。子どもたちがそれらに触れることで、さまざまなことを学べる。これまで島でやっていなかった、人が集えて楽しく有意義なイベントや体験メニューをオリジナルで創っていきたい」と話してくれた。

「しまのテーブルごしま」がある廃校になった小学校では、毎年六月初旬頃に「ごしま音楽プール」というイベントが開催されている。プールの中につくられたステージにアーティストが集う野外ライブだ。このイベントを「ごしま音楽プール実行委員会」とともに主催するのが「株式会社ごしま」という地元の汽船会社であり、同社の山下峰代表取締役専務がまた若く、力が溢れている男である。同イベントでは、グラウンドにマルシェが約一店舗ほど立ち並ぶのだが、約半数は島内からの出店だ。今年で四回目を数え、島内外から四〇〇人もの人たちが訪れ、島に賑わいをもたらしている。

今後、協議会の世代交代を考えねばならないのだが、私も他の理事たちも、山下氏はこれからの島を牽引していく一人と期待している。その期待を受け、今年四月、新たに協議会の理事になってくれた。「これからのツーリズム活動は、忽那諸島全体でより連携していくことが必要。島は、少子高齢化が進み、これから一〇年くらいで大きく変わるだろう。人口が減っても、社会がきちんと機能するよう、うまく地域づくりができれば」と語ってくれている。

「株式会社ごしま」では、興居島を訪れた人に島を満喫してほしいという想いから、独自に「ごしままっぷ」というパンフレットを作成している。現在、日本語と英語に対応しているが、韓国語と中国語版も作成中とのことだ。また、島内の空き家を活用し、移住促進も行なっている。山下氏は、地元企業として、これからの島のあり方に真摯に向き合ってくれている。

### 島びとが活き活きと暮らせる島を目指して

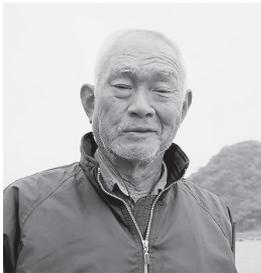
「忽那諸島の若者が、島で子どもを育てられる、そんな環境に戻したい」——松山離島振興協会を立ち上げた頃からの私の一番の目標だ。「島びとが活き活きと暮らせる島」は、松山市が掲げる構想と同じである。まだ道半ばだが、これまでに多くの人が私たちの島のファンになってくれた。

忽那諸島では、紅まどんなやせとか、カラマンダリンなどの、生活を豊かにすると期待できる柑橘や、タイ・ハマ

チ・アジをはじめとするさまざまな魚介類、ヒジキ・テングサなどの海藻といった海の幸にも恵まれている。それらの恵みとともに、島びとの心の温かさに触れることができる。

私の島に「ただいま」とやって来る人、私のことを「お父さん」と呼んでくれる人たちがいる。島を心地良く思っていてくれており、ツーリズムの活動をしてきてこれ以上に嬉しいことはない。じつは、お客さんよりも、私のほうが楽しんでいられるのかもしれない。

島のファン、島に遊びに来てくれる人をもっと増やす。そして島に関わってくれて、何度も足を運んでくれるような人ももっと増やす。それが私の使命であり、これからもできることをやっていきたい。



田中政利 (たなか まさとし)

昭和21年生まれ。愛媛大学農学部附属農業高等学校卒業後、農業研修生として渡米。帰国後、温州ミカンや伊予柑栽培の傍ら、ゴカイ養殖に取り組む。平成18年松山離島振興協会を設立し、「しまはく」開催などに尽力。同23年まつやま里島ツーリズム連絡協議会の設立に携わり、現在まで会長を務める。